



Title	澤田徳藏君の「米消費地の研究と米品種論」
Author(s)	渡邊, 侃
Description	紹介
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 8, 310-312
Issue Date	1940-03
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/10688">https://hdl.handle.net/2115/10688</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_p310-312.pdf



殖鐵道迄よく計劃され實行されて居る。唯恐く計劃が其の限度を知らず他との關係的考慮なしのプログラムの羅列、一方的遂行である爲めに誤つた點が多いであらう。前田氏の「農産物増收に伴ふ經濟更生計劃」も其の意味の注意を用ひてある。「計劃事項の徒らなる羅列―それは多くの他の町村の計劃を模倣し無批判に採用した場合が多い―を排除し村の特徴を生かし更生の重心を把握しそれを中心とした計劃とし、内容は目標と實行の大綱を定め、具體的實施方法の如きは年々之を定め動きつゝある状態に適應して行くことにしなければならぬ」と主張して居る。

斯かる意味に於て工藤元氏の「北海道に於ける農業保險の諸問題」と東隆氏の「北海道の農事小組合問題運動」の二編が北海道の實情を闡明し、建設的な見解を披瀝した意味に於て尊重さるべきである。唯工藤君の場合計算の根據を示してもらひたかつたし、東君の場合散居獨立農家の組合が府縣の様な密居倚存農家の組合の性質差を闡明してもらひたかつた。

要之、本特輯は北海道農業特に其の發展經過に關する稍々硬い紹介であるが嚴正なる批判が少く將來に關する展望並びに政策の具體案を缺いて居る點に於て未だ甘いものであると云はれても仕方がないであらう。

(昭和十四年十二月)

## 澤田徳三君の「米消費地の研究と米品種論」

渡邊侃

此著者は大正八年北大農經學科卒業の農學士で、幼から神童とも云ふべき男だつたが、其機敏さを米相場に打込み、遂に失敗してしまつたのを、拾はれて大阪堂島米穀取引所の調査役となり、市場實米の研究では第一人者となつたのを買はれ、最近大日本米穀株式會社調査課長になつた人である。

斯く世情に通じた著者が其經驗を(中には彼の師「白髭やた老師」の意見もある)人に讀ませる様に書いて邦國に奉仕する志を果さんとしたのが標題の書である之を所謂學問的に書いたならば學位論支にもなるであらう。併しそれは著者の目的ではなかつたと思ふ。

以下本書の結論する所を述べて紹介に代へる。

第一に本邦に於ける米穀消費の地方的特性の代表的なものとして「東京は小ツブを好み大阪は大ツブを好む」「小ツブのシャープな米は腹にもたれる」「大ツブは炊きぶえ」がしフンワリして腹にもたれぬ、「上

米については東京が大阪に鞘寄せして大粒のものを上米視し、下米については大阪が東京に鞘寄せして小ツブオーライとなる」と云ふて多少大阪の嗜好を上視するが嗜好はかなりの程度まで習慣であつて近隣地方産米を良米とするものだ」と云ふて居る。特に中等米についてさうであつて上等米の場合通的に移動し遠隔地から齎されるとする。それで普通米の場合移出が多く

なるのは何らか特殊の原因がある、例へば「靜岡縣が其産米の政府格差を高めんとするならば靜岡縣に於ける縣産米と移入米との格差が如何に縣産米に不（印刷では有となつて居るがそれでは全然意味がとれない）利な状態にあるかを政府當局に認識せしむべきであるそれを大阪に犠牲出荷して大阪の聲價を高め政府格差を有利に導かんとするなど甚しい見當違と云ふべきである。長野の東京へ對する態度も同様である」（一三一頁の註）の如き注意すべき事項が割合に簡單に取扱はれて居る。或産地の得意先とする地方の多いのも感心しないと云ふて居る。供給力を養ひ需要力を確保する必要がある。それで、特に上質米を出す品種に重點を置かず多收的品種を目指すのが産米改良方針として重要だと見て居る。

各消費地帯の府縣各地方米、朝鮮米、臺灣米の各上

中下米等の消費量の割合が刻明に計算されて居る。世上では農林省などの統計が利用されて居るが、輸入にも遺漏があり、著者獨特の推定が有力に用ひられて居る、上米三分一と云ふのが計算上も推定上も一致したる結論であつた。

斯くして中米を主張し品種の選擇は「收量の多いこと、容積重の大なること、味のよいこと」の順序で行くべしとなつた、容積重大なることの如きは玄米が容量取引なるに對し白米が重量取引なることの如き制度的の問題とも考へられて居る、搗減の少い、炊きぶえの多い、白上りの量のよい、等の補助條件が加はる。併し最大なるは收量多きことであるとするのである。それで米穀検査等級の如きも一二等の如きを纏めて一階級とし、等外を四等とする等で救ふべしとするのである。

朝鮮米との競争上内地では朝鮮で作らぬ品種を作るべしとするのは一創見であらう。但し朝鮮米が並米として扱はるゝ意味から云へば上米を生産せよと云ふことになり矛盾ではある。唯其方針は充分取入れられる。近畿地方の旭種（多收で品質がよい）關東北陸の農林一號（極早生で新米として朝鮮米の味付に用ひられる）東北の陸羽一三二號（冷害抵抗性で品質がよい但し品

質を目的として冷害地以外にも作られる傾向があるが（不適當）の如きが推賞さるゝわけである、之に反し銀坊主、愛國の如きは朝鮮の品種として重要だとする。朝鮮は例へば肥料の如き窒素のみと云ふ様な技術の低劣さがあるから旭の如き稻熱病の危険の多い品種は出来ぬと云ふのである。

斯くして各地に於て獎勵すべき品種を研究して居る。

此書は米穀商人、産業組合關係者及農業技術並びに經濟指導研究家の座右になくてならぬ書である。

（昭和十四年十二月）

## 東畑精一氏著「米」に就て

渡邊 侃

著者は人も知る氣鋭の農政學者である。其の論法は純粹經濟學的であり従つて單なる農政論に盡きては居ない。態度は批判的であつて細いあらも探さうとする。それで本邦經濟問題中の最大問題の一つたる米の問題を分析し批判する。

第一に米の消費上の性質が分析される。

「わが國の農産物ほど一般的に云つて國家統制政策の對象になりやすいものはない……と云ふのは外國から同種農産物の競争を受けることがなく逆に外國に輸出する量も先づ微量であるから……一つ拙い政策を實行するとエスケープを外國に求めて逃げてゆくと云ふ様な農産物を持つて居る國々の農業行政官は殊に價格行政に於て餘程の經濟的訓練が必要とならざるを得ない……日本行政官はその點では甚だ氣樂であると申さねばならない。」

だがそれだからと云つて安心してはならない。我國の農産物生産者たる多數の小農民は技術的には非彈力的なる生産方法をとるが、經濟的には彈力的な消流方法を取る。例へば「割のあはぬ」農産物を僅かばかり賣ると云ふことはなさぬ、彼等は餘計に自家消費すると云ふのである。之は農村の景氣のよい時の話であるが反對に不作でも起つた場合に就ては「統計上に擧げらるゝ米の外に青米とか小米とか屑米とか端米とかある、これらの統計外の米の數量は例へば冷害とか多雨の年には甚多い……ところが早魃過熱の年には……稻の完熟の程度が良くて従つて統計外の米の量が甚しく減少して來る……理外の理がある」とする。之は小生が「米穀消費の性質」（農經研一〇ノ四昭九）に書